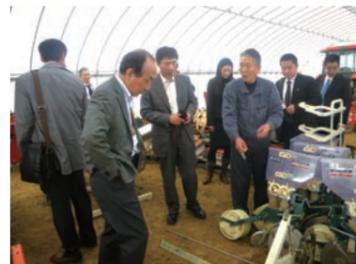




豊岡市の水田に降り立ったコウノトリ。人とコウノトリが生活圏を共有する風景がまた見られるようになった



豊岡市内の営農組合を訪れ、農業用トラクターに興味を示す慈溪市の農業技術員(右手前)

コウノトリを

呼び戻す環境づくりを

コウノトリの飛来地として知られる兵庫県豊岡市。
有機農業の普及や環境教育を通じて、
コウノトリと人が共存できる社会をつくる。
そのノウハウを中国の慈溪市に伝えている。



[兵庫県]

豊岡市



庵東鎮に試験的に作られた水田で、稲の付き方や生物を調査する兵庫県の専門家



豊岡市

面積697.66km²。人口約8万5千人。海、山、川など豊かな自然の恵みを生かし、農林水産業が盛ん。人と自然の共生を目指して長年コウノトリの保護に取り組み、環境整備や啓発活動を実施。友好都市であるモンゴル・バヤンホンゴル県ボグド郡などと国際交流事業も行っている。

する環境教育も積極的に行っている。そして2010年、同市のこの取り組みを中国に伝えることに。コウノトリはかつて中国にも多く生息していたが、農村では農業による水質汚染が深刻で、ほとんどその姿は見られなくなった。その事実を知った兵庫県と豊岡市がJICAの草の根技術協力事業を通じて、環境に配慮した農業と環境教育の普及に協力することになった。

同じ思いを共有して地域を変える

協力の対象は慈溪市庵東鎮。杭州湾を挟んで上海の対岸に位置し、「杭州湾新区」として政府から有機農業の推進モデル地区に指定されている。綿花や大豆、ブドウなどの農業が盛んで、市と村が連携し、環境改善に積極的に取り組もうとしている地域だ。

この地に有機農業を根付かせ、かつて生息していたコウノトリが戻ってくる環境を取り戻す。兵庫県の農業改良普及センターの農業技術員を専門家として庵東鎮に派遣し、試験的に作られた水田で農業技術を指導。また、日本での研修では慈溪市の行政官や農業技術員が豊岡市を訪れて実践例を学んだ。

「稲を植えるときはどれくらいの間隔が必要ですか?」「農薬を使わずに、どのように害虫を抑えていますか?」。慈溪市の農業技術員の意欲は高く、さ

まざまな質問が飛ぶ。プロジェクトを統括するNPO法人食と農の研究所の倉石寛さんは、「言葉が分からなくても、研修員と豊岡市の農家が身ぶり手ぶりで理解し合っているのを見て驚きました。農業機械や農協の仕組みなど、豊岡市に来て新たに知ったことがたくさんあったようです」と振り返る。

そして、プロジェクトで特に力を入れたのが環境教育だ。中国では、小学校高学年で自分が住む地域の歴史や自然環境などを学ぶ「地域学習」の授業がある。そこで庵東鎮の小学校の校長を中心に、慈溪市の職員も巻き込んで副読本の作成に取り組んだ。杭州湾の水環境、生態系や食物連鎖の仕組み、豊岡市の有機農業などを写真やイラストを使って解説している。

これを使って、庵東鎮の小学校で豊岡市の小学校教員が環境教育の授業を実施。さらに慈溪市の教育担当者が豊岡市の小学校で授業を視察し、環境教育の指導法について学んだ。子どもたちが正しい知識を身に付ければ、地域全体で環境づくりに取り組む下地ができるはずだ。

豊岡市コウノトリ共生課の三笠孔子課長は、「コウノトリと共存できる環境づくりを目指し、県や市、農協、NGOなどさまざまな機関、そして市民が力を合わせています。この地域ぐるみの取り組みを中国でも参考にしてもえれば」と期待する。その願いは海を超え、中国の人々に届いている。

人と自然の共生を表すシンボルを掲げて

長い口ばし、広げると2メートルにもなる大きな翼。日本に生息する鳥の中では最大級のコウノトリが、ひらりと田んぼに舞い降りる。ドジョウやカエルなどのえさを採りにきたようだ。兵庫県豊岡市では、こんな風景がしばしば見られる。

江戸時代には、日本各地の里山で目にしたコウノトリ。しかし、明治以降は乱獲や土地開発による生息地の破壊が進み、農業の影響で田畑からもえさがなくなった。そしていつの間にか、その姿がほとんど見られなくなってしまった。

豊岡市を中心に広がる豊岡盆地は、江戸時代からコウノトリの生息地として有名。このような状況を受けて、1950年代から住民の間で保護活動が始まり、60年代からは独自に人工飼育を開始。71年に日本国内の野生のコウノトリは絶滅してしまったが、豊岡市は試行錯誤しながら人工繁殖を続け、89年に初めてヒナが誕生。その後、順調に数を増やし、2005年以降は育てたコウノトリを野生に返し、今は約60羽が自然の中で生きている。



庵東鎮の小学校で環境教育の授業を行う豊岡市立城崎小学校の教員(中央)



プロジェクトで作成した環境教育の副読本。写真やイラスト入りで分かりやすく子どもたちに大人気